

楽しさが広がり夢中になって遊ぶ園児を育む

～協同性を育む共主体の保育を通して～

糸満市立喜屋武こども園保育教諭 川村千秋

I テーマ設定の理由

生活の多様化、都市化、情報化、少子化の進展に伴い、子どもの生活空間の中に自然や広場などといった遊び場が少なくなり、子ども同士が関わって遊ぶことが減少している。幼児を取り巻く環境のアンケートによると「幼稚園や保育園以外で、平日『だれと一緒に遊ぶことが多いか』について尋ねた結果は、『友だち』が27.3%、『母親』は86.0%。(中略)20年間で大幅に『友だち』の割合が減り、『母親』は年々増加している。」(ベネッセ教育総合研究所2015)ことが明らかになっており、子どもの日常生活は、園と家庭での活動が中心となっている。このことから、同年代の友達と関わることができる幼保連携型認定こども園(以下『こども園』)の役割は重要である。

集団生活の場であるこども園では、園児が保育教諭や友達に親しみ、人と人との関わりを通して様々な体験ができるよう、園児が今どのようなことに興味や関心を向けているのか、遊びの何に楽しさを感じているのか保育教諭が共感的に受け止めて環境を構成し、柔軟な関わりをすることが必要である。幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説(以下『教育・保育要領』)の領域「人間関係」内容の取り扱い(3)で示されているように、園児が友達と関わる中で、様々な出来事を通して、多様な感情体験を味わい、友達との関わりを深め、互いの思いや考えを共有し、共通の目的に向けてやり遂げる協同した遊びは重要である。

そこで協同性を育むためには、園児が多様な「人、もの、こと」に触れ、遊びを楽しみ、次第に友達と共に夢中になって遊びを繰り返していくことが大事である。そのため、保育教諭の遊びの読み取りや環境の構成、遊びの振り返りは重要である。

これを踏まえ、遊びの中で直接的・具体的体験を通して「おもしろい」「もっと知りたい」「試したい」と遊びから学びに向かう園児の主体的な姿を捉え、園児の興味関心に沿い「やりたい」遊びにつなげ、園児と対話しながら環境を構成し、教材研究としてドキュメンテーションやサークルタイム、ウェビングマップ等を活用して、遊びの展開に応じた保育教諭の援助を探っていきたいと考える。

そこで本研究においては、楽しさが広がり夢中になって遊ぶ園児を育むため、園児一人一人が主体的に遊ぶ姿を捉え、共主体の保育を通して協同性を育むことを探りたいと考え、本テーマを設定した。

II 研究の目標

協同性を育む共主体の保育を通して、楽しさが広がり夢中になって遊ぶ園児を育む実践研究をする。

III 研究の方法

- 1 協同性が育まれていく過程を基に先行研究から学ぶ。
- 2 保育教諭の援助について探る。
- 3 保育実践の結果を分析し、改善を図る。

IV 研究内容

1 楽しさが広がり夢中になって遊ぶためには

(1) 園児の遊びの確保

子ども達の現状は、三間の喪失と言われ「遊ぶ時間、空間、仲間」が子ども達の生活から失われていることが指摘されている。無藤・古賀

(2016)は「子どもらしさを受け止められなくなっている現代社会の価値観の変化」により、

子どもが大人中心の生活へと余儀なくされている現状を示している。子どもの日常生活は、園と家庭での活動が中心となっていることから、こども園においては本来の子どもらしい遊びを中心とした生活を送る必要があると考える。

子ども達にとって最も重要なのは「今」である（資料1参照）。今起こっていることや今自分が感じとっていることが子どもの生活や遊びの中心となる。

また、文科省の資料では「幼児期は、遊びを中心として、頭も心も体も動かして、主体的に、様々な対象と直接関わりながら、総合的に学んでいく。遊びを通して思考を巡らし、想像力を発揮し、自分の体を使って、また、友達と共有したり、協力したりして、様々なことを学ぶ。」と明記されている。これを踏まえると、こども園での園児の遊びは大事である。

(2) 遊ぶための環境の構成や保育教諭の援助

教育・保育要領では「園児が興味や関心をもち、思わず、関わりたくなるような人やもの、事柄があり、さらに、興味や関心が深まり、意欲が引き出され、意味のある体験をすることができるように適切に構成された環境の下で、園児の主体的な活動が生じる。」と示されており、園児が主体的に活動できるためには、園児の周りにある様々な事物、生き物、他者、自然事象などが園児一人一人にどのように受け止められ、いかなる意味を持つのか保育教諭自身がよく理解する必要がある。

そのためには、保育教諭が「園児の行動や発見、努力、工夫、感動などを温かく受け止めて認めたり、共感したり、励ましたりして心を通わせ、(中略)園児の展開する活動に対して必要な助言・指示・承認・励ましなどが含まれる。」と教育・保育要領に示されている。これを踏まえ、遊ぶための環境の構成や保育教諭の関わり方を意識して保育に取り組み実践研究を行う。

(3) 協同性とは

教育・保育要領では、生きる力の基礎を育むため、こども園の教育及び保育において育みたい資質・能力として、三つの柱を掲げている。その資質・能力が育まれているこども園修了時の具体的な姿を「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」として明確化し、その中の一つである協同性に焦点をあて、楽しさが広がり夢中になって遊ぶ園児を育む研究を進めていく。教育・保育要領において協同性とは、「友達と関わる中で互いの思いや考えなどを共有し、共通の目的の実現に向けて、考えたり、工夫したり、協力したりし、充実感をもってやり遂げるようになる。」と示されており、園児は、友達と一緒に楽しく遊んだり活動する中で、互いのよさや特性に気づき、友達関係を形成していく。友達関係が広がったり深まることで、共通の目的やイメージを見いだし、工夫したり、協力したりしながら園生活を楽しくしていく。そのため、友達と関わり協同性を育む遊びを大切にしたい。

- ・子どもは今を中心に生きている
- ・子どもはここにあることを中心に生きている
- ・子どもは自己を中心として生きている
- ・子どもはその感覚で捉えたことを中心として生きている
- ・子どもは徹底的に試すことで知る
- ・子どもは大人にとって汚いことが好き
- ・子どもは大人にとって面倒なことが好き
- ・子どもの生活はほとんどが遊びである

資料1 無藤・古賀 2016

(4) 協同性を育むためのプロセス

「協同性」が育まれていく過程（資料2）の中で大事なものは、園児が安心感をもって集団生活を過ごすことである。それは保育教諭との信頼関係を築くことで生まれてくる。保育教諭がりのままの園児を受け入れ、見守り、支えることで園児は保育教諭との信頼関係を育み、自己発揮することができるのである（資料2第Ⅰ期）。保育教諭との信頼関係が築かれると、友達への興味も広がり、関わりが生まれてくる。その中で、友達と一緒に遊ぶ楽しさや面白さを味わう（資料2第Ⅱ期）。さらに、園児の主体的な活動の中から友達との思いや考えを交わし、新たな発見をすることで共通の目的が見えてくる。その目的を実現するために言葉でのやりとりが必要となってくる（資料2第Ⅲ期）。無藤

	第Ⅰ期	第Ⅱ期	第Ⅲ期
発達時期	初めての集団生活の中で様々な環境と出会う時期	遊びが充実し自己を発揮する時期	人間関係が深まり学び合いが可能となる時期
協同して遊ぶようになる過程・経験内容			
	<ul style="list-style-type: none"> ○同じ場で見たり触れたり行為を模倣したりする ○場を共有し、つながり合う気分を味わう ○イメージの世界に没入、感情を共有する ○友達存在を、好意をもって受け入れようとする ○友達のことを感じながら、個々の遊びを楽しむ 	<ul style="list-style-type: none"> ○場やものを共有し、友達とかわかって遊ぶ楽しさ ○イメージや考えを伝え合い、表現する楽しさを味わう ○葛藤を乗り越え、友達と一緒に遊ぶをつくりだす ○友達と刺激し合いながら、自分の世界を広げる 	<ul style="list-style-type: none"> ○目的を共有し、友達と相談しながら遊びを進める ○新しいアイデアや遊びのルールを生み出す ○グループや学級の中で、役割を意識して取り組む ○友達のよさや持ち味を感じながら、目的を実現し達成感を味わう ○様々な人とのかわりの中で刺激を受けながら、自分の見方や考えを広げる

(2018)は「協同的な遊びが展開するために重要なものが対話」とし、「誰かの気づきや発見、興味・関

資料2 文科省「協同して遊ぶようになる過程」

心などが、そのことをもっと探究していこうという原動力」と述べている。そこで、保育教諭が園児の思いをつないでいくことが大事である。協同的な遊びが展開する中で様々な思いや考えを伝え合うことにより、多様な対話や情報収集、試行錯誤する力が育つと考える。これを踏まえ、園児同士が関わり、対話し、互いのイメージをもち協同して遊ぶことで友達と一緒に夢中になって遊ぶのではないかと考え、実践研究において「協同して遊ぶようになる過程」の段階を踏まえ園児の姿を捉えていきたい。そのためには協同して遊ぶようになる過程を意識した保育教諭の関わりが必要である。

2 協同して遊ぶようになる過程を意識した共主体の保育

(1) 共主体とは

保育教諭は、園児が主体的に遊びに向かうためにその発達や季節等に応じた環境の構成や、主体的に遊びに向かう園児に寄り添い、時にはうなずき共に楽しむ良き理解者、共同作業である。そこには、保育教諭も主体となって考え動き、園児の心の動きに応じた環境の構成や援助の工夫を行っている。

共主体について大豆生田(2023)は「子どもと大人の主体がバランスよく共存、融合している主体である。」と述べている。また、古賀・那須(2022)は「子どもの主体性を引き出すために保育者はどのような主体性を発揮しながら関わっているのかという視点で、子どもと保育者が共に主体である保育とはどのようなことなのかについて共主体による保育を実践・展開していく上で重要だと考えられる4つのポイント」(資料3)を示している。また、「日常の保育の中では、主体となって生活し、遊ぶのは子どもだけではない。保育者も一人の人間である以上、主体

- ①子どもたちが今どのようなことに興味や関心を向けているのか、遊びの何に面白さを感じているのかを保育者が共感的に受け止めていくこと。
- ②子どもたち自身が「自分たちで生活や遊びをつくり出している」と実感しながら過ごすことができているのかを保育者自身が瞬間的に振り返りながら子どもたちと関わっていくこと。
- ③子どもの小さな変化を見逃さず、子どもの遊びが移り変わっていく、その変化のプロセスを意識的に捉え続けようとする姿勢を保育者が持ち続けることができているかという視点。
- ④保育者が子どもを信じてその活動の展開を子どもに任せることができているかという点。

資料3
共主体の4つのポイント
(古賀・那須 2022)

として何かしらの思いを持って関わるのが重要だと考える。」と示していることから、本研究では共主体という考え方にに基づき、子どもと保育者が共に主体となる保育について考えていきたい。そのためには、子どもも保育者も一方向的な関わりではなく、双方向的で互恵的な関係であることを前提とした保育実践を可視化する手がかりを考えていくこととする。

(2) ドキュメンテーション、AARA サイクル

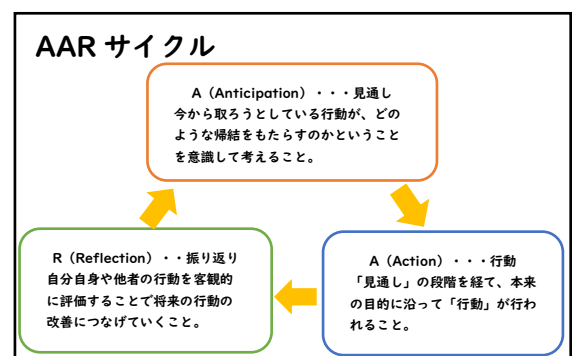
保育ドキュメンテーションとは、子どもの様子を写真や動画、音声などで記録する手法である。子どもの様子の記録をもとに、子どもの視点に立って、子どもの気持ちを考え語り合うことで、保育の振り返りと次の計画に活かしていくことを目的としている。保育ドキュメンテーションを作成し、保育を進めながら、保育教諭自身の保育のやりがいを実感する機会につなげ、こども園の遊びの様子をもっと保護者に伝えられるように工夫していく。そこで「保育ドキュメンテーション」5つの原則（資料4）を参考にしながら作成していきたい。また、子どもの遊びのつながりや振り返りの方法として白井（2020）「AAR サイクル『見通し、行動、振り返り』（資料5）」を活用していきたいと考える。「AAR サイクル」を参考にして「AARA サイクル」とし、さらなる見通しをもって協同した遊びの展開につなげるように工夫していきたい。

(3) 協同性を育むための保育教諭の援助

教育・保育要領第1章第2節2(3)指導計画の作成上の留意事項⑤では「園児が次の活動への期待や意欲をもつことができるよう、園児の実態を踏まえながら、保育教諭等や他の園児と共に遊びや生活の中で見通しをもったり、振り返ったりするよう工夫すること。」と述べられている。その中で、保育教諭は園児の楽しかったことや嬉しかったこと、悔しかったことなどを振り返り共感し、園児同士の思いをつなぐ役割としてファシリテーターの質を向上させていきたい。また、協同して遊ぶ中で園児が困難にぶつかった時に寄り添い「どうしてかな」「何かいい方法はないかな」と投げかけることで新たなひらめきとなり遊びの展開につなげていくことができるだろうと考える。保育教諭は、園児一人一人の言葉に耳を傾けながら、園児が言い尽くせないでいる、あるいは他の園児に伝えきれていない言葉を補いながら、学級全体で楽しい雰囲気をつくれるようサークルタイムで話し合い、ドキュメンテーションやウェビングマップを活用し、可視化して園児と遊びの展開や振り返る際に活かしたいと考える。

- ア 「エピソード記録」と「写真」で、保育者がまとめた記録（写真に代えて、イラスト、動画などでも可）
- イ やったことだけでなく、子どもの具体的な姿、子どもの心・力の育ちが伝わる記録。
- ウ 保育者のみならず、子ども、保護者、さらには地域の人も見ることができ、対話を引き出す。
- エ その作成を通して、保育の振り返りや計画作りができる記録。
- オ これによって、保育の力が高めあえ、「子どもや保育がおもしろい！」と思えてくる記録。

資料4 「保育ドキュメンテーション」5つの原則
（大豆生田・おおいだ 2022）



資料5 AAR サイクル（白井俊 2020）

ウェビングマップ	思い付いたアイデアを次々と記載していき、そのアイデアをつなげていく思考の整理に役立つ。また、そのアイデアが生まれた場面が可視化でき、その場面に戻って、また違うアイデアをつなげていくことができる。
サークルタイム	子どもたちが輪（サークル）になって座り、みんなでいろんなことを話し合う活動のこと。子どもたちがお互いの顔を見ながら対話することが大切。

資料6 ウェビングマップ・サークルタイム

V 研究の実際

1 園児の主体的な姿から保育者がどのような環境を構成し、援助を行ったのか共主体の視点で検証し、AARA サイクルで考察、園児の変容、協同性を育む姿を捉える。

研究テーマに基づいた保育実践を行い、共主体の視点（園児の主体的な姿から保育者がどのような環境を構成し、援助を行ったのか）で検証、AARA サイクルで考察する。また、遊びの展開の中でドキュメンテーション、サークルタイム、ウェビングマップを活用して協同性を育む遊びの展開につなげる。

共主体の保育の視点で検証
・園児の主体的な姿（心の動きからの発言や行動）
・保育者主体（主体的に遊ぶ園児の心の動きから意識した環境の構成や援助、保育者の願い）

2 検証前の姿〈背景〉

雨上がりの園庭を探索する園児たちは、ガジュマルの木の根元に水たまりができていることに気づく。その水たまりに落ち葉や木の枝、木の実を浮かせて遊び「もっと水を増やそうよ。」とジョウロから水を流し、たまっていく様子を見ている。「砂場はたまらないのに。」とつぶやいた園児が、何かひらめいた様子で砂場の道具入れから樋やスコップ、カゴなどを取り出しガジュマルの木の根元で遊ぶ姿が見られた。その後もピオトープや水たまりを見つけると何かを浮かせて遊ぶ姿が見られる。保育教諭は、そんな浮かせて遊ぶ園児の姿に着目する。また、地域伝統行事の「喜屋武ハーリー」が行われるため、地域行事にも触れてほしい思いから「ハーリーごっこ」につなげたい思いがあった。



水たまりで遊ぶ園児

3 検証保育

「協同して遊ぶようになる過程 第Ⅰ期」（船作りのはじまり、きっかけ）

【検証場面1】 「魚が見える船」（6月11日）

園児の主体的な姿 (心の動きからの発言や行動)	保育者主体 (主体的に遊ぶ園児から意識した ★環境の構成 ○関わり、願い)
<p>・喜屋武ハーリーを見てきた子ども達から「お母さんとみてきたよ。」「お父さんもハーリーに出たよ。」と伝え合う姿が見られる。</p> <p>船に絵を描く</p> <p>魚が見える船を作る</p> <p>・遊びの中で「船を作りたい。」と声上がり、空き箱を使って思い思いの船を作り始める。</p> <p>・対話をしながら素材に触れ、その素材からイメージが生ま</p>	<p>○地域行事「喜屋武ハーリー」が行われることから、ハーリーごっこにつなげたい。</p> <p>★ハーリーに関する写真や新聞記事を掲示する。</p> <p>★様々な素材の空き箱を用意し、種類別に分けて環境を整える。</p> <p>○★ハーリーごっこにはつながらなかったが、船作りを楽しんでいる姿を肯定的に捉え、船作りに必要な空き</p>

<p>れ、「魚が見える船を作ろう。」となる。</p> <ul style="list-style-type: none"> 船作りでは、セロテープでとめる子、支える子、マジックペンで模様を描くなど、自然とそれぞれの「やりたい」を楽しみながら進めている。 船作りの中で、友達と同じイメージをもち作ることが嬉しくて「今日の給食一緒に食べようよ。」「うん、いいよ。」と一緒に食べることを約束している。互いの思いがピタッと合った瞬間の嬉しさを感じているようだった。 	<p>箱や道具をその都度増やしていく。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○船作りの中で、切る、貼る、支える、書くなど自分のやりたいことに夢中になって取り組む園児の主体的な姿に「いいね」と合図を送り認め、安心して遊び込めるような雰囲気をつくる。 ○空き箱の素材からイメージが広がり、そのイメージを友達と共感共有できる嬉しさから、安心して遊び込む姿が見られる。(協同して遊ぶようになる過程 第Ⅰ期)
--	--

【検証場面2】 「水は上に上がらない」(6月12日)



<p>園児の主体的な姿 (心の動きからの発言や行動)</p>	<p>保育者主体 (主体的に遊ぶ園児から意識した ★環境の構成 ○関わり、願い)</p>
<ul style="list-style-type: none"> 船を作った子ども達は、「浮かせてみたい。」とわくわくしながら園庭に出る。 「砂場に穴を掘って水をためようよ。」と提案する子がいた。それに賛同した園児たちは、砂場に穴を掘り、ブルーシートを敷いて水をためようとバケツで水を汲んでいる。 S児が砂場から水場に向かって樋を並べはじめ、それを見てM児もJ児も並べはじめた。 砂場から水場まで樋を並べ終わると水道の栓を開け、「水いけー。」と期待と共に水は砂場一直線に流れることを予想していた園児達は「え！」と驚く。水は砂場とは反対の方向に流れていく。 M児「まってまってなんでだよ。」と疑問を声に出しながら、樋の重ね方を変えたり持ち上げたりしている。 じっと見ていたD児が「水、上に上がっていないよ。」と気づきをM児やJ児に伝える。 M児とD児は樋の下にカゴや椅子を置いたり、ジョウロを使って水を流してみたりと、何度も繰り返し試す姿が1時間半続いた。 	<ul style="list-style-type: none"> ○作った船をすぐに試したい園児の思いを汲み取り、みんなで園庭に出る。 ★水をためようとしている園児の姿から必要な道具をさりげなく用意しておく。(樋、スコップ、バケツ、ブルーシートなど) ○効率よく水をためようとした園児の考えに保育者も「面白い」と感じながら、あえて声はかけず園児たちで考えて遊びをつくり出していく姿を見守る。 ○水の流れに「なぜ」と問う姿に着目する。 ○自分たちで水の流れに必要な条件を見つけ出せるように保育教諭からは答えは出さないようにする。 ★樋の下において試せるような、砂場用の椅子やカゴを取り出しやすい場所に用意しておく。 ○水の流れに「なぜ」と問いを繰り返



砂場から水場に向かって樋を並べる

<p>【振り返りの時間】</p> <ul style="list-style-type: none"> 今日の出来事を話し合い、水を流すには <p>I 児「スタートを高くすればいい。」</p> <p>D 児「水の勢いが必要。」</p> <p>と気づきや考えを伝え合う。</p> <ul style="list-style-type: none"> 今日の気づきや話し合ったことを明日は試したい。 	<p>す園児と共に保育者も一緒に水がうまく流れる方法を考えていく。</p> <p>○D 児の「水は上に上がらない。」という子どもらしい表現を受け入れ、その表現をクラス全体に伝える。</p> <p>○園児一人一人から出た声をつないで、クラス全体で共有し、明日への遊びに期待をもたせる。</p>
---	---

〈検証場面 1・2 AARA サイクルをもちいた考察〉

<p>【A】 見通し</p>	<ul style="list-style-type: none"> 水たまりに落ち葉や木の実を浮かせて遊ぶ姿やハーリーを見に行った経験から、ハーリーや船に興味をもつだろう。 保育教諭はハーリーごっこにつなげたい思いがあった。 ハーリーに関する写真や新聞記事を掲示し、ハーリーの話を出していく。 船作りに使えそうな空き箱を種類別に分けて環境を整えることでハーリーごっこにつながるだろうと予想した。 	
<p>【A】 行動</p>	<ul style="list-style-type: none"> 園児は用意した環境に気づき、空き箱をつなげて「船を作ろう。」と船作りに展開していった。 空き箱の素材からイメージが生まれ「魚が見える船。」や「レスキューの船。」など思い思いの船作りがはじまる。 船作りを通して友達と思いが通じ合う嬉しさを感じている。 作った船を浮かせたい。 砂場に船を浮かせられる池を作ろう。 なかなか水がたまらない。 効率よく水をためようと考えたS 児のアイデアを取り入れて樋を並べていく。 水は砂場に一直線に流れると思っていたが、反対方向に流れていく。 砂場へ流れない水に「なぜ」と問いが繰り返し、樋の高さや重ね具合を変えて粘り強く試行錯誤する。 I 児は、M 児とD 児が樋の下にカゴや椅子を置いて水を流そうと繰り返し試す姿をじっと見ていた。 	
<p>【R】 振り返り</p>	<ul style="list-style-type: none"> 地域行事「ハーリー」が行われることから地域伝統行事に触れてほしい思いがあり、ハーリーごっこにつながるように環境を構成したら「船作り」に展開する。 ハーリーごっこにはつながらなかったが、園児の「船を作りたい。」思いを尊重し、船作りが楽しめるように関わっていった。 船作りを通して同じイメージをもち遊ぶ姿から協同して遊ぶ過程の第I期と捉え、園児の楽しさが広がるような関わりをしていった。そのような関わりをすることで、様々な素材の空き箱を使って思い思いの船作りを楽しむ姿が見られた。 砂場に水を流したいM 児とD 児の粘り強く繰り返し試す姿に保育教諭は感動する。その姿をクラス全体に伝え共有し、どうしたら「うまく水が流れるか。」問い、サーク 	 <p>サークルタイム</p>

	<p>ルタイムで話し合い、安心して発言できるような雰囲気をつくることでヒントとなる発言がたくさん出る。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・水を流す方法として園児から出た「高さ」と「勢い」のキーワードを取り上げて、次の遊びで試してみようと期待をもたせる。 ・船を浮かせたい思いから、水の流れに興味や関心をもつきっかけとなった。
<p>【A】 さらなる見通し</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・園児の船を浮かせたい思いに寄り添い、船を浮かせる場所やもの（プールやタライなど）を用意する。 ・十分に遊べる時間の確保をする。 ・さらなる遊びの展開につながるように空き箱の種類を増やし、取り付けるためのテープ（セロテープ、ガムテープ、ビニールテープ、マスキングテープなど）の種類を用意しておく。

「協同して遊ぶようになる過程 第Ⅱ期」（素材の性質に気づき、色々な船を作る）

【検証場面3】 「紙は水に負ける」（6月14日）

<p>園児の主體的な姿 (心の動きからの発言や行動)</p>	<p>保育者主体 (主體的に遊ぶ園児から意識した ★環境の構成 ○関わり、願い)</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・T児は紙素材で作った船を水たまりに浮かせてみた。 ・しばらくすると「船、ふにゃふにゃ。」とつぶやき、取り付けていた部分が外れ、底の部分はふやけて破れてしまった。 <div data-bbox="373 1081 643 1290" style="text-align: center;">  </div> <div data-bbox="655 1189 876 1285" style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px auto; width: fit-content;"> <p>水たまりに船を浮かせるT児</p> </div> <p>【振り返りの時間】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・T児の紙素材の船が破けてしまったことをD児は「紙は水に負けた。」と言う。 ・M児、D児、B児は、発泡スチロールトレーやプラスチックの弁当皿、牛乳パックで作った船は破けなかったと教えてくれた。 ・水に強い素材、弱い素材があることに気づく。 <p>〈環境の構成を園児と共に変えていく〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・友達に「これは水に強いからここだよ」と素材を確認し、自分たちが遊ぶ環境を整えている。 	<ul style="list-style-type: none"> ○「作った船を浮かせたい。」T児の思いに共感し、船を浮かせる様子を近くで見守る。 ○紙素材のT児の船が水に浸かると破けてしまうことは予想していたが、素材の性質に気づくきっかけとなればと思い、保育教諭はあえて声かけはしなかった。 ○紙素材のT児の船が破けてしまったことをクラス全体で話し合い、「なぜ破けてしまったのか。」投げかけてみる。 ○「紙は水に負けた。」と言うD児の分かりやすい表現を取り上げ、素材の性質の違いについて話し合う。 ★空き箱素材の性質の違いに気づいた園児は「水に強い」「水に負ける」と表現し、それを「分類したい」と声があがったので、部屋の環境を再構成していく。 ○様々な素材を使って船作りをすることで、素材の性質の違いに気づくこと



【検証場面4】 「まだ成功じゃない」（6月17日）

ができたことをクラスで共有し、水に負けない性質の素材を使った船作りが楽しめるように関わっていく。

<p style="text-align: center;">園児の主體的な姿 (心の動きからの発言や行動)</p>	<p style="text-align: center;">保育者主体 (主体的に遊ぶ園児から意識した ★環境の構成 ○関わり、願い)</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・プールに水をためるために必要な樋をたくさん出してきた。 ・樋の高さを調節するためにテーブルを置いてスタート地点を高くしている。 ・樋の重ね方や向き、高さの調整を友達と力を合わせて取り組んでいる。 <div style="text-align: center;">  <p style="border: 1px solid black; padding: 2px;">樋を重ねる</p> </div> <ul style="list-style-type: none"> ・樋をつたって水が流れ、水がたまることに成功する。 ・「やったー！つながった」と万歳をして喜び、プールに水がたまと自分たちで作った船を浮かせてみる。 ・B児「浮いた浮いた、俺たちの船浮いたー。」 T児「僕のレスキューも浮いたー。」 と船が浮いて喜んでいる。 ・M児「乗ってみたいな」と牛乳パックで作った船に乗る。 <div style="text-align: center;">  <p style="border: 1px solid black; padding: 2px;">牛乳パックの船に乗る園児</p> </div> <ul style="list-style-type: none"> ・船は園児の重みでへこんでしまった。 <p>【振り返りの時間】</p> <p>保育教諭「今日は水が流れて大成功だったね。」</p> <p>B児「あと船も浮いて大成功！」と喜ぶ園児たち。</p> <p>J児「だけど、まだ成功じゃないよ。」</p> <p>保育教諭「まだ、成功じゃないの？」</p> <p>J児「うん、だって船に乗りたいたいもん。」</p> <p>D児「そうだよ、船に乗ってみんな競争するの、ハーリ</p>	<ul style="list-style-type: none"> ★樋を使って水を流し、水をためたい園児の願いが叶うように、プールを用意する。また、水場からの距離を短くする。 ★樋の高さが調節できるように、台となるテーブルや長椅子、カゴなどを園児が見つけやすい、目につく場所に用意しておく。 ○園児が協力し合い、テーブルや長椅子を運ぶ様子を見守り、自分たちで遊びをつくり出していこうとする姿を認め、言葉にして伝える。 ○樋を使って水を流し、ためること、船を浮かせることに成功し、園児と共に万歳をして喜ぶ。 ○牛乳パックの船に「乗ってみたい」園児の思いに「いいね」と共感し、遊びのさらなる展開を見守る。 <div style="text-align: center;">  </div> <ul style="list-style-type: none"> ★ICTを使って、今日の遊びの様子の写真や動画を見て、気づきや困り感、楽しさを振り返る。 ○「船を浮かせる」「船に乗る」ことができて満足していると思っていたが、園児はさらなる遊びの発展に心動かせていることに気づく。 ○★ここで「ハーリー」が出てきたこと

<p>「みたいに。」「あとね、漕ぐやつ作らないと。」</p> <p>保育教諭「ハーリー？漕ぐやつ？」</p> <p>D児「そう、これ！エーク！」と言い、部屋に張られているハーリーの写真を指さして伝えていた。</p> <p>・園児の思いはどんどん溢れて、「ペットボトルをつなげて大きな船を作り、みんなで競争がしたい。」となった。</p>	<p>に驚き、ハーリー舟を作るのに必要な道具を予測し用意する。</p> <p>○船作りを通して、空き箱の素材や水の流れの性質に気づき、船を浮かせるために必要なもの、ことが園児なりに経験を重ねるごとにわかり、友達と遊びを進める楽しさを味わっている。(協同して遊ぶようになる過程 第Ⅱ期)</p>
---	--

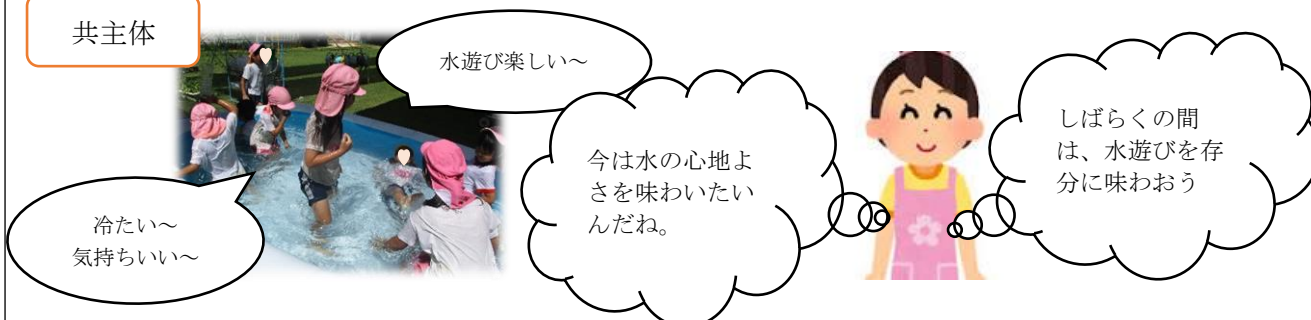
〈検証場面3・4 AARA サイクルをもちいた考察〉

<p>【A】 見通し</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・園児の船を浮かせたい思いに寄り添い、船を浮かせる場所やもの（プールやタライなど）を用意する。 ・十分に遊べる時間の確保をする。 ・さらなる遊びの展開につながるように空き箱の種類を増やし、取り付けるためのテープ（セロテープ、ガムテープ、ビニールテープ、マスキングテープなど）の種類を用意しておく。
<p>【A】 行動</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・紙素材の船は水に浸かるとふやけて破れてしまうことに気づく。 ・水に強い、弱い素材があることを知り、水に強い素材を使って船を作ろうとする姿につながる。 ・友達の気づきが遊びの発展につながり、友達の良さを感じている。 ・水をためるため、友達と協力しながら試行錯誤する姿が見られる。 ・水をためることができたことで船を浮かせることにつながる。 ・船を浮かせることに成功した園児は船に「乗ってみたい。」とさらなる思いに心が動いていた。
<p>【R】 振り返り</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・船作りを通して、素材の性質に気づき、それをクラスで共有する。 ・園児一人の気づきをクラス全体で共有することで、「水に負けない船作り」へと展開する。 ・園児の願いを叶えるためプールを用意し、水場からの距離を短くしたことで、水をためることに成功する。 ・水を流すためには「高さ」と「勢い」が必要と自分たちで気づいたことをもとに友達と共通の目的に向かって試行錯誤する「協同して遊ぶようになる過程」第Ⅱ期の姿が見られた。 ・「こうじゃないか。」「いや、こうだと思う。」と自分の思いや考えを言葉にして伝え合い、思いを通わせ、遊びを進める姿に協同して遊ぶ喜びを感じた。 ・水を流す、船を浮かせることに成功し、満足したのではないかと思っていたが、園児の「船に乗りたい。」というさらなる願いに楽しさが広がり遊びが発展していく瞬間を捉えた。 ・園児から「ハーリーがしたい。」と出てきたことに驚き、園児がやりたい「ハーリー」につながる関わりと環境を用意していきたい。
<p>【A】 さらなる見通し</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・園児の中に「ハーリー」のイメージがあったことに驚き、ハーリーごっこが展開しやすいうようにハーリーの写真を増やしたり、必要な道具や空き箱を用意したりする。 ・手に取りやすい場所に船に関する絵本や図鑑を用意していく。 ・大きな船作りができるように製作コーナーの場所を広くするなど環境の構成を工夫していく。

【検証場面5】 「水遊びがしたい」（6月19日）

○梅雨明けした暑さのもと、船作りが途絶えて水遊びになる時期もあったが、園児の「水の心地よさを味わいたい。」思いに共感し、園児と共に水遊びを存分に楽しむことで、再び船作りに没頭する。

共主体



「協同して遊ぶようになる過程 第三期」（目的を共有、互いの考えを取り入れて遊ぶ）

【検証場面6】 「大きな船を作ろう」（6月24日）

園児の主体的な姿
(心の動きからの発言や行動)

- ・ドキュメンテーションの写真をたどっていくと「作って、試して、壊れて」を繰り返していることに気づく。



ドキュメンテーション
を見て遊びを振り返る

- ・「次は壊れない丈夫な船を作りたい」と新たな願いをもつ。
- ・丈夫な船を作るためには「ペットボトルを2個ずつガムテープと輪ゴムで固定して、それをたくさん作ること。」
- ・「完成するまでは水に入れないこと。」
- ・「乗るためには22個は必要。」
- ・今まで以上に意欲的に船作りに夢中になる。
- ・支える、ガムテープを切る、貼る、ゴムでつなげるなど作る過程で友達と協力する姿が見られる。



新しいアイデアを伝える

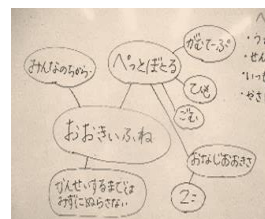


友達と協力しながらペットボトルをつなげている

保育者主体

(主体的に遊ぶ園児から意識した)
★環境の構成 ○関わり、願い)

- ★時系列に並べた船作りのドキュメンテーションを掲示する。(船作りがはじまった頃から徐々に写真を増やして掲示している)
- 船作りの様子を、ドキュメンテーションを活用しながら園児と振り返り、これまでのつまずきに気づいてほしい。
- 丈夫な船を作るためにはどうしたらいいのか投げかける。
- 園児から出た考えにうなずき、それぞれの考えを拾い、つなげて船作りに必要な手立てとして整理していく。
- ★見通しをもち取り組めるよう、ウェビングマップにして可視化する。

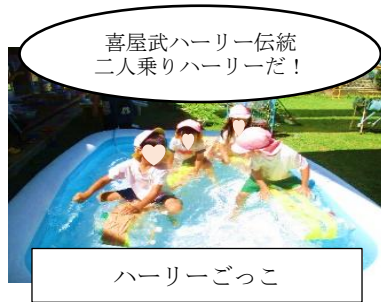


- ★場所を広くして船作りが楽しめるように環境を整える。

<ul style="list-style-type: none"> ・船作りより色水遊びや虫探しを楽しんでいた園児も船作りに加わる。 ・みんなでペットボトルを数えることで「22」まで数える経験ができた。 ・ペットボトルをつなげていくことでハーリーをイメージし、「ハーリーみたいにお化粧しようよ。」と絵も描いている。 ・クラス全体で「ハーリーがしたい。」という共通の目的をもち、船作りに夢中になって取り組む姿が見られる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○これまで船作りに興味を示していなかった園児も、友達の楽しそうに船を作る姿に魅力を感じ、船作りに加わるようになった。その楽しさを言葉にして認め共有していく。 ○これまでは10以上数えることができなかった園児が22まで数える経験ができたことに協同して遊ぶ中で学び合いを感じた。 ○船作りを通して園児一人一人が「ハーリーがしたい。」思いとなり、共通の目的の実現に向けて、考えたり、工夫したり、協力したりし、充実感をもってやり遂げるようになっていく。(協同して遊ぶようになる過程 第Ⅲ期)
--	---

【検証場面7】 「ハーリーだ！」(6月28日)

○出来上がった船をプールに浮かせて、ハーリーごっこを楽しむことができた。

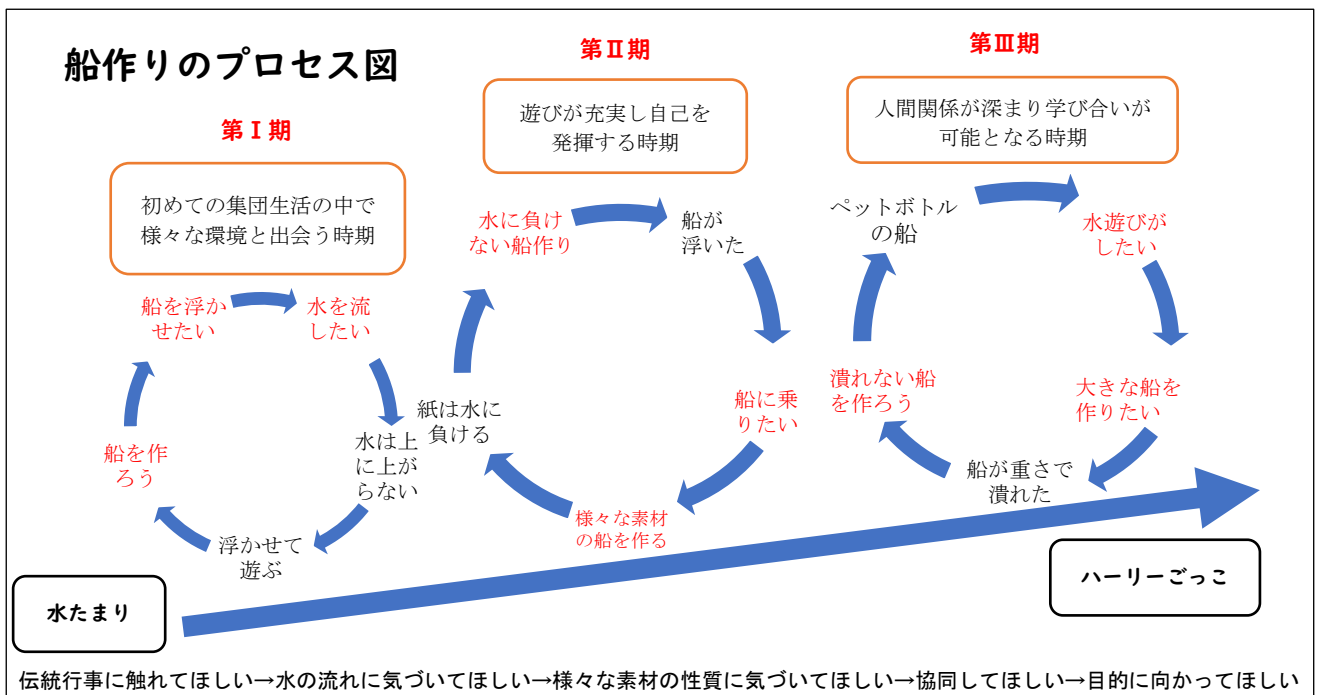


〈検証場面5～7 AARA サイクルをもちいた考察〉

<p>【A】 見通し</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・園児の中に「ハーリー」のイメージがあったことに驚き、ハーリーごっこが展開しやすいようにハーリーの写真を増やしたり、必要な道具や空き箱を用意したりする。 ・手に取りやすい場所に船に関する絵本や図鑑を用意していく。 ・大きな船作りができるように製作コーナーの場所を広くするなど環境の構成を工夫していく。
<p>【A】 行動</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・暑い夏の到来に水の心地よさを味わい、一時期は船作りが途絶える。 ・園児が満足するまで水遊びを存分に楽しむ。 ・ドキュメンテーションを見て、これまでの船作りが「作って、試して、壊れて。」を繰り返していることに気づく。 ・成功するためにはどうすればいいのかクラス全体で話し合う。 ・成功するには、「J児のアイデアを取り入れること。」「完成するまでは水に入れないこと。」「ペットボトルを22個用意すること。」などそれぞれの考えや思いを伝え合い、これまではなかった計画を立てて実行に向かう姿が見られた。 ・船を作る過程で、友達の発想や考えの面白さに気づき、友達の良さを感じる。 ・話し合ったことをウェビングマップで可視化することで見通しをもつことができた。 ・J児の作った船の良さを取り入れて、みんなで大きな船を作ることを目標とし、取り組む中で協同性が育まれていくことを実感しているようだった。(第Ⅲ期) ・これまで船作りに興味を示さなかった園児も、楽しそうに作る友達の様子から、船

	<p>作りに加わり一緒に船作りを楽しんでいる。</p> <ul style="list-style-type: none"> 船を作る過程でペットボトルの数をみんなで数えることで「22」まで数える経験ができた。 つなげていくことで「ハーリー舟」をイメージし、本物の船のように模様を描いていた。
【R】 振り返り	<ul style="list-style-type: none"> 一時は水遊びとなり、このまま船作りが終わってしまうのかと様子を見ていたが、園児の「水の心地よさを味わいたい。」思いに共感していくことで再び船作りに没頭することとなる。 水遊びを楽しみたい園児の思いを叶えるため、プールを2つ出して存分に水遊びを楽しむ。 船作りがはじまった頃からの写真を並べたドキュメンテーションを掲示することで、「作って、試して、壊れる。」を繰り返していることに気づくきっかけとなった。 船作りを成功させたい園児の思いを汲み取り、園児から出た考えに「いいね。」と応答し、思いをつないでいくことで、これまでは聞いているだけだった園児からも声上がるようになった。 園児から出た考えをウェビングマップにして書いていくことで、見通しをもち、自分たちで船作りを進めていくことができた。 船作りを通して、誰もが成功させたい思いとなり、クラスの仲間意識が感じられ、協同して遊ぶ喜びを感じた。 目的を達成するために自分たちで決めた約束事を守り、共通の目的の実現に向けて、考えたり、工夫したり、協力したりし、充実感をもってやり遂げるようになっていく。 ハーリーごっこを実現できた成功体験が、園児たちの自信につながっている。 船作りを通して協同性を育み楽しさが広がり夢中になって遊ぶ園児の姿につながっている。
【A】 さらなる見通し	<ul style="list-style-type: none"> 「小学校のプールでも船を浮かせて遊びたい。」と園児から声が上がったので小学校と連携し実現できるように調整する。 絵本や図鑑、インターネットから情報を収集し、さらなる船作りのヒントとなるものを掲示していきたい。 ペットボトルや取り付けるガムテープの数を増やし、園児が存分に船作りができるように用意していきたい。

〈検証場面全体の考察図〉



VI 研究の成果と課題

1 研究の成果

- (1) 共主体の保育を通して、園児が今何に楽しさを感じているのか見極めることで、必要な環境の構成や関わりが見えてきた。また、園児の「やりたい」「試したい」という思いに寄り添い、気づきや考えを引き出してつなげていくことで、水の流れや素材の性質に気づき、さらなる探究心へとつながった。
- (2) 協同して遊ぶようになる過程を踏まえ、園児一人一人の主体的な遊びを尊重し保育教諭が多様な関わりをもつことで船作りの楽しさが広がり、友達と協同し、船作りという共通の目的に向かって夢中になって遊ぶことができた。
- (3) 遊びの展開をドキュメンテーションで表示し、時系列に写真を並べたことから園児自身が遊びのつまずきや楽しさに気づくことができた。その気づきを安心感のもてるサークルタイムで話し合い、互いに出し合った考えをウェビングマップに可視化することで、遊びの見通しがもてて、結果ハーリーを完成させることができた。

2 今後の課題

- (1) 園児が今何を感じて楽しんでいるのか見極め、遊びを中心とした生活を基本とし、こども園だからこそ繰り広げられる協同した遊びの展開に向けた工夫を今後もしていきたい。
- (2) 協同して遊ぶようになる過程の段階を踏まえ、園児の姿を捉えた保育教諭の関わりを模索し幼児理解を深めていきたい。

〈主な参考文献〉

- 文部科学省 厚生労働省 『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』 フレーベル館 2018年
- 無藤隆・古賀松香 編著 『社会情動的スキルを育む「保育内容 人間関係」』 北大路書房 2016年
- 無藤隆 編著 『幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿』 東洋館出版社 2018年
- 大豆生田啓友 おおえだけいこ 編著 『子どもが中心の「共主体」の保育へ』 小学館 2023年
- 古賀萌子・那須信樹 『共主体の視点から捉える子どもと保育者が織りなす遊びの一考察』 2022年
[https://nakamura-u.repo.nii.ac.jp/record/2951/files/01-001-55-03%20\(2024/05/01](https://nakamura-u.repo.nii.ac.jp/record/2951/files/01-001-55-03%20(2024/05/01) アクセス)
- 大豆生田啓友 おおえだけいこ 編著 『日本版保育ドキュメンテーションのすすめ』 小学館 2020年
- 白井俊 著 『OECD Education2030 プロジェクトが画く教育の未来』 ミネルヴァ書房 2020年